

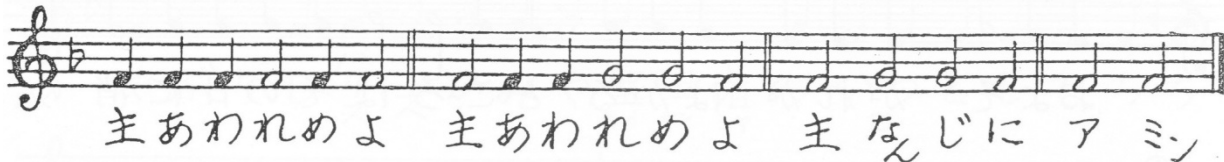
五旬祭聖体礼儀 (単音)

輔祭 君や、祝讃せよ

司祭 父と子と聖神の・・・

(詠) アミン

【大連祷】



輔祭 我等安和にして主に祷らん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 上より降る安和と我等が ^{たましい} 霊 ^{すくい} の 救 の為に主に祷らん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の為に主に祷らん

輔祭 この聖堂、及び信と慎みと神を畏る心とを以て、ここに來たる者の為に主に祷らん、

輔祭 教會を司る尊貴なる我等の東京の大主教及び全日本の府主教ダニイル、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の為に主に祷らん、

輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の為に主に祷らん。

輔祭 ^こ 此の都邑と ^{まち} 凡の都邑と ^{およそ} 地方の為、及び ^こ 信を以て ^{うち} 此の中に ^お 居る者の為に主に祷らん、

輔祭 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に祷らん、

輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、^{うれ} 艱難に ^{もの} 遭ふ者、^{かんなん} 遭ふ者、^{そう} 虜となりし者、^{しゃ} 及び ^{とりこ} 彼等の救の為に主に
祷らん、

輔祭 我等 ^{もろもろ} 諸の ^{うれい} 憂愁と ^{いかり} 忿怒と ^{あやうき} 危難とを免るが為に主に祷らん、

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 ^{けだし} 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時(いつ)も世世に

(詠) アミン

祭【第1 アンティフォン】第18 聖詠、第二調。

ソロ 救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

第1 アンティフォン 附唱



救世主や 生神女の祈禱によつて、我等を救いたまえ

ソロ 第一句 諸天は神の光栄を伝う。諸天は神の光栄を伝え、^{おおぞら}穹蒼はその手の^{しわざ}作為を誥ぐ。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

ソロ 第二句 日は日に^{ことば}言を宣べ、夜は夜に智を施す。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

ソロ 第三句 その声は全地に伝わり、その^{ことば}言は地の^{はて}極に至る。

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

ソロ 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン

(詠)救世主や、生神女の祈禱に依りて我等を救ひ給へ。

【小連禱】

輔祭 我等またまた安和にして主に^{いの}禱らん、

(詠)主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}助け救い憐み護れよ、

輔祭 ^{し せい し けつ}至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等^{おのれ}己の身及び互に各の身を以て、ならびに^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠)主爾に

司祭 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

(詠)アミン

祭 【第2 アンティフォン】 (第十九聖詠、同調)

ソロ 仁慈なる^{ぶじゅつしや}撫恤者よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌う¹者を救ひ給へ。

第2 アンティフォン 附唱

仁慈なる^{ぶじゅつ}撫恤者よ

我等 爾に アリルイヤ を 歌う もの を ^{すく}救い た ま え

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌う者を救ひ給へ。

ソロ 第一句 願くは主は憂いの日に於て爾に聴かん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌う者を救ひ給へ。

ソロ 願くは主は憂いの日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を^か扨ぎ衛らん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌う者を救ひ給へ。

ソロ 第二句 願くは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌う者を救ひ給へ。

ソロ 第三句 願くは主は爾の心に循いて爾に与え、爾の謀る所を悉く遂げしめん。

(詠) 仁慈なる撫恤者よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌う者を救ひ給へ。

栄は父と子と聖神に帰す いまもいつもよよ にア^ミン 神の独生の子並びに

ことば や 死せざる者にして我等を救^わんがためあ^まんじて聖なる生神女永

貞童女マリヤより身をと り 神の性を変えずして人となり十字架に釘うた

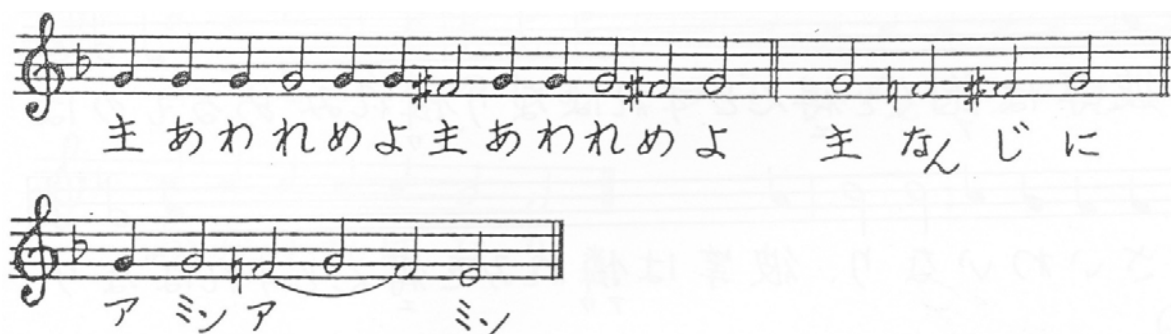
れ 死を以て死を踏み破りし^ハリ^ス か みや せい三者のい つとして

父と聖神と共に讃栄せらるゝの主 や われらをすく いたま え

¹ 『五旬経略』は「献る者は」だが使徒経は「歌う者」なので使徒経に準拠した。

【小連祷】

輔祭 我等またまた安和にして主に^{いの}禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}助け救い憐み護れよ、
 輔祭 至聖至潔^{しせいしけつ}にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等^{おのれ}己の身及び互に各の身を以て、ならびに^{ことごと}悉くの我等の生命^{いのち}を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に
 司祭 蓋國と権能と光荣は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世に、 (詠) アミン



祭 【第3 アンティフォン】、(第二十聖詠、第八調)

第一句 主よ、王は爾の力を楽しむ。

讃詞 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神[°]を遣して睿智者と為し、彼等を以て世界を漁し得たり、人を愛する主よ、光荣は爾に帰す。



ソロ 第1句 主よ、王は爾の力を楽しみ、爾の救を^{きわまり}歡ぶこと極なし。

(詠) トロバリ 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ・・・

ソロ 第二句 その其心に望む所は、爾これを与え、その口に求むる所は、爾之を^{いな}辭まざりき。

(詠) トロバリ 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ・・・

ソロ 第三句 蓋爾は仁慈の祝福を以て彼を^{むか}迓へ、純金の冠を其^{こうべ}首に冠せたり。

(詠) トロバリ 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ・・・

【来たれ】聖入の句 主よ、爾の力を以て自ら挙げ、我等は爾の権能を歌頌讃栄せん。

(来たれハリストスの前に)

来たれ主のま えにふしをがまん かみの子

仁慈なるぶじゅつ者や汝にアリルイヤをたて

まつるもの をすくいたま え

祭 【トロバリ+コンダク】

トロバリ 8 調 崇め讃めらるる哉ハリストス我等の神よ、爾は漁者に聖神^oを遣して睿智者と為し、彼等を以て世界を漁し得たり、人を愛する主よ、光栄は爾に帰す。(楽譜前ページ、第3 アンティフォンと同じ)

光栄 今も

コンダク 8 調 至上者は降りて舌を消しし時、諸民を分てり、火の舌を頌ちし時、衆を一に集め給へり、故に我等同一に至聖神^oを讃栄す。

あがめ 讃めらる かな ハリストス 我等の かみよ

なんじは 漁者に 聖神を 遣わして 睿智者 と な し

かれ等を以て 世界を 漁しえ たり

ひとを愛する 主や、 光栄 は なんじに 帰 す

光 栄は父と子と 聖神に 帰す 今も何時も 世 世に アミン

至 上 者 は く だ り て

し た を み だ し し と き 諸 民 を 分 か て り

火 の 舌 を 分 か ち し と き 衆 を 一 つ に 集 め た ま え り

ゆ え に 我 等 同 一 に 至 聖 神 を 讃 栄 す

輔祭 主や、敬虔なる者を救い、及び我等に聴き給え

主や、敬虔なるものを救い、及び、我らに聴き た ま え

祭 ♪ アミン

(聖なる神の代りに) 三度繰返す

ハリス によって洗を受けしもの ハリス を 衣 た り ア リ ル イ ヤ

光 栄 は 父 と 子 と 聖 神 に 帰 す 今 も い つ も 世 々 に ア ミ ン ハ リ ス

を 衣 た り ア リ ル イ ヤ ハ リ ス によって 洗 を 受 け し も の

ハリス を 衣 た り ア リ ル イ ヤ

祭 【ポロキメン】 第八調

誦經 その声は全地に伝はり、其言は地の極に至る。



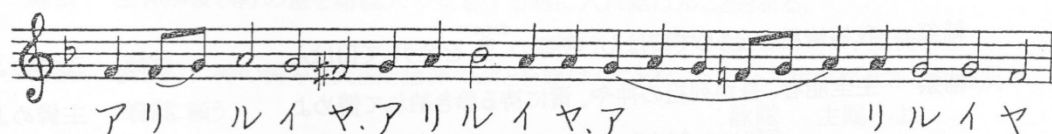
誦經 (句) 諸天は神の光栄を伝へ、^{おおぞら}穹蒼はその手の作為を誥ぐ。

【聖使徒行実の讀】 2:1~11

彼の日五旬節の日至りて使徒皆心を一にして共に在り。忽天より声ありて、迅しき風の度るが如し、彼等が坐せる所の家に満てり。岐れたる舌、火の如き者、彼等に現れて各人に止れり。彼等皆聖神に満てられて、異方の言を言ひ始めたり、神の彼等に言はしめしが如し。時に敬虔なるイウデヤ人、天下の諸國より来りて、イエルサリムに居る者あり。此の聲の作りし時、大衆集りて躁ぎたり、蓋各々己の方言を語るを聞けり。皆駭き且奇みて、互に言へり、視よ、此の語る者は皆ガリレヤ人に非ずや。如何にして我等は各我が生れし所の方言を聞くか。我等はパルフィヤ、ミディヤ、エラムの人、メソポタミヤ、イウデヤ及びカッパドキヤ、ポント及びアシヤ、フリギヤ及びパムフィリヤ、エジプト、及びキリネヤに近きリフィヤの地方に居る者、ロマより来りし者、イウデヤ人及び進教者、クリト及びアラビヤの人たるに、如何にして彼等が我が方言を以て、神の大用を語るを聞くか。

祭 【ア ril イヤ】 1 調

天は主の言にて造られ、天の全軍は其口の氣にて造られたり。 句 主は天より鑑みて悉くの人の子を視給へり。



【福音經の讀み】

輔祭 君や、聖使徒及び福音者（ 某 ）の福音を宣ぶる者に祝福せよ、

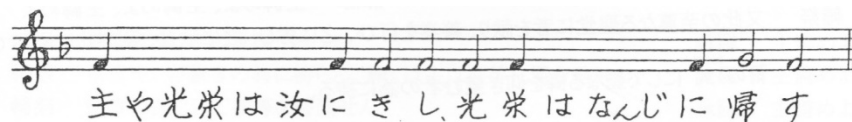
司祭 願くは神、光栄にして讃美たる聖使徒及び福音者（ 某 ）の祈祷によって、爾福音を宣ぶる者に多くの力ある言を賜はん、その至愛の子我が主イイススハリストスの福音の行るるが為なり。

輔祭 アミン、睿智、謹み立て、聖福音經を聴くべし

司祭 衆人に平安 (詠) 爾の神にも

司祭 叡智、謹みて立て、聖福音經を聴くべし

輔祭 イオアン伝による聖福音經の讀み



(イオアン 7:37-52)

節筵の末の大なる日にイイスス立ちて呼びて曰へり人渴かば、我に來りて飲め。我を信ずる者は、聖書に云へる如く、其腹より活ける水の川は流れん。之を言ひしは、彼を信ずる者の受けんとする神を指せるなり、蓋聖神未だ降らざりき、イイスス未だ榮を受けざればなり。民の中多くの者此の言を聞きて曰へり、斯の人は誠に預言者なり。他の者は曰へり、斯れハリストスなり。又他の者は曰へり、豈ガリレヤよりハリストス來らんや。聖書にてハリストスはダウィドの裔より、且ダウィドの居りし處なるウィフレムより來ると、云へるに非ずや。是に於て民の中に、彼の事に縁りて紛論起りたり。其中の或る者彼を執へんと欲したれども、手を彼に措く者なかりき。下吏は司祭諸長及びフリセイ等に返りたれば、彼等之に謂へり、爾等何ぞ彼を曳き來らざる。下吏答へて曰へり、人未だ曾て斯の人の如く言ひしことあらず。ファリセイ等は彼等に答へて曰へり、豈爾等も惑はされしか。有司或はファリセイ等の中に彼を信ぜし者あるか。惟此の民、律法を識らざる者は詛はるゝなり。夜イイススに來りしニコディム、彼等の中の一人なる者は、彼等に謂ふ、豈我が律法は、未だ人の訟を聴かず、其行ふ所を知らざる先に、人を罪するか。彼等答へて曰へり、爾も亦ガリレヤよりするか、尋ねて見よ、預言者はガリレヤより起るなし。イイスス復衆に語りて曰へり、我は世の光なり、我に従ふ者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。(詠) 主や光榮は爾に歸し、光榮は爾に歸す

以下通常の聖体礼儀と同じ

ただし

祭 【常に福に代えて】

代へて「イルモス」女王至榮の母たる童貞女よ慶べ云々

女 王、 至榮の母たる童貞女よ、 よろこ - べ

いかに滑らかなる 能弁の くちも 宜しき にかないて

爾を歌う あた わ - ず 如何なる 智 - 恵 - も

爾の産を 悟るを 得 - ず

故に我等心を ひとつにして 爾 を 讃 榮 す

祭

願くは爾の善なる神^o は我を義の地に導かん。「アリлуйヤ」。三次

領聖詞 聖詠142:12



第一百四十二聖詠 拔粹

主よ、我が祈りを聆き、爾の眞実に依りて我が願いに耳を傾けよ、爾の義に依りて我に聴き給え。

爾の僕と訟えを為すなかれ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざらん。

我^{いにしえ}古の日を想い、凡そ爾^{わが}の行いしことを考え、爾が手の工作を計る。

我が手を伸べて爾に向かい、我が ^{たましい} 霊は渴ける地の如く爾を慕う。

(我に爾の旨を行うを教え給え、爾は我の神なればなり、願わくは爾の善なる神は我を義の地に導かん。)

主よ、爾の名に依りて我を生かし給え、爾の義に依りて我が^{たましい}霊を苦難より引き出し給え、

爾の憐れみを以て我が敵を滅ぼし、凡そ我が^{たましい}靈を攻むる者を^{たいら}夷げ給え、我は爾の僕なればなり。